

いとしい恋人たち

佐多稲子

文藝春秋新社

佐多稻子

いとしい悪人たち

いとしい戀人たち

昭和三十一年九月五日 印刷
昭和三十一年九月十五日 發行

定價 二七〇圓

著者 佐々木 多子

發行者 車谷 弘

印刷者 北川 武之輔

發行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

萬一落丁亂丁の節はお買求めの書店又は發行所にてお取換致します

印刷 細川活版所
製本 新宿加藤製本

いとしい戀人たち

装 幀
口 繪

著者近影

マダム・マサコ
カメラ 濱谷 浩

秋風が吹くから、街の灯が心にしみる。まだ六時を過ぎたばかりだけど、とっぷり暮れて、驛前の廣い道を、さあっと風がなでてゆく。果物屋だの菓子屋だの、洋服布地屋の灯りが、キラキラかがやいて、何んとなくわが家が戀しい。そんな氣持を起させる夕方だった。

阿佐ヶ谷の踏切りには今、驛から降りて來た人たちが、道いっぱいにな重なって遮斷機があがるのを待っていた。電車の往來はまだ劇しい。目の前をおotto音を立てて長い電車が通過する。遮斷機があがるたびに、自動車や自轉車にはさまれて人々が流れる。

ミカン色のセーターをきた安西みどりは人の背中に喰つつくようにして渡り終えると、まっすぐ、商店の並んだ狭い道を歩いていった。今日の彼女は、あたりの何も目にはいらぬみだいた。顔を仰向けているのは、涙のこぼれてくるのを要心しているのにちがいない。

宮内咲子の家はそんなに遠くはなかった。赤いバスが通ると、道がいっぱいになる狭い商店街を左に折れてゆくと、ちんまりした住宅街で、板塀圍いの家や、小庭のある家が並んでいる、石だたみの

露路へもいちど曲がつてその中程。安西みどりがふと氣がつくと、見覚えのセメント柱の門を、誰か男がはいってゆく。彼女はちょっと足をとめていた。

「あら、お歸んなさい」

リーンと、戸の開く音がして、かん高い女の聲がした。その戸がまた閉まったのを聞いて、安西みどりは歩き出した。セメント柱の門をはいって行くと、玄關わきの宮内咲子の部屋には、いいあんばいに灯がついている。みどりはそっちへ行つて窓格子を叩いた。

「誰れ？」

聲と同時に人影が立ち、上のガラスから咲子がのぞいた。

「あたし」

「何だ、みいちゃんじゃない。玄關あけるわ」

左右にあかる古めかしい格子戸の玄關、その上には、表札が三つかかっていた。一番古くて大きいのに、矢澤、とだけ、新しいのに中富常治、そしてもう一枚は名刺で河井清一。宮内咲子もこの住人だけど、彼女の表札はない。格子戸が開くと、またリーンと鳴った。

咲子の顔を見たときに、みどりは、ああと泣き出した。まるで子どものように手ばなしなのだ。

「まあ、どうしたの。馬鹿ねえ、さ、はいんなさい。聞えるじゃない」

みどりは咲子より先きに駈けあがつて、すぐ左手の咲子の部屋へ。咲子がいってゆくと、みどりは窓に身體をもたせてしゃくっていた。

「どうしたの。びっくりするじゃない」

「駄目なの。咲子さアん」

そしてまた、うふふつと泣いた。

咲子は夕飯前の小さな茶ぶ臺を片よせて、

「駄目って、鐵夫さんが？」

「何もかも駄目なの」

「どうしたのよ、話さないよ」

「あの人、田舎へかえっちゃうの」

「あなたとのこと、やめて？」

「だって、そうなるのよ。だってしょうがないのよ」

「そんなことある？」

「そう云わないでよ」

すすり上げて、ハンカチで涙をふくと、みどりの目が腫れぼったく顔全體がぼやけて見えた。すうと息をすって、ぼんやりと肩を落す。

「しょうがないわね」

と咲子は年上みたいな表情になって突っ放した。そのくせ咲子の方がひとつ下だった。小柄のきつちり締まった顔立ちに、勝氣らしく目がよく動く。

「あんた、御飯食べた？」

「ううん、だけどたくさん」

「だめよ、栄養不良になつてよ」

「たくさんなの」

「食べなさいよ。少しでも」

「いいの」

「いやだな、ひとりで食べるの」

また茶ぶ臺を引き寄せて、

「あたし、おながが空いたんだ」

「聞いてよ、私の話」

と、みどりは甘えたようにべそをかいて、恨めしげに云った。すると咲子はわざと取り澄ました顔つきで

「あたしの趣味に合わないんだわ、そんなの」

「そんなの、って、どんなこと」

「やめて歸っちゃうなんて、そんなの嫌い」

「だって、そう云わないで。あの人、弱いよ。可哀想なのよ。二人で泣いたの」

「馬鹿ねえ」

咲子は手早く、もひとつの茶碗にみどりの御飯をついで、

「はい、食べるのよ」

一尾の秋刀魚を二つに切つてのせた皿をまん中に、のりのつくだ煮がある。

「ちょっと待って。キャベツを切ってくるわ」

臺所へゆくと、つづいた茶の間の障子があいて、この家の女主人の矢澤タカがのぞいた。幅のある年寄りの聲で、

「お客さまですか」

「ええ」

「あたしや、また、次枝かとおもって。あんたのお客さまだったのね」

何でもない言葉だけど、どこか齒切れのよい、下町ふうの東京言葉だった。云いながら、ラジオのスイッチを切ったらしく、いきなり、ざあっと拍手が聞えてきて、——場内のみなさん、今晚は……と、二十の扉がはじまる。キャベツを切って出て来ると、廊下で中富の奥さんに逢った。

「これから、御食事？」

「ええ」

「お友達ね、さっき、どうしたの」

「え？」

「泣いてたみたいだったから」

「何でもないんです」

「そうお。お漬物、あげましょうか。茄子がとってもいい色に漬かってるの」

「ありがとう、いいんですの」

うるさいな、とおもつてすり抜けて來た。

洋間になつてゐる河井の部屋は、灯はついてゐるけれど、まだ御主人の歸りはないらしくひっそりしてゐる。

一軒の家に、主人の矢澤タカが娘の次枝と二人暮し、あとの部屋は全部貸して、中富、河井の二夫婦に、宮内咲子の小ぢやかな世帯まで加えて四つの世帯が住んでゐた。咲子は部屋の襖をきっちり閉めると、聲をひそめて、

「チャカチャカ奥さん、うるさいわ。お婆さんは、次枝さんの歸りがおそいもんだから、カン立ててゐるし」

「どうしたの」

「あんたの泣いたの、早速、聞かれちゃつたのよ」

「聞かれたつてかまわないわ。だって、私、こんなとき、感情を抑えたりできないんですもの」と、もう一度みどりは泣きべそをかく。

「あきれた人ねえ」

「あなた、経験がないからよ」

そう云われると咲子は、ぎろつと目を動かして、

「経験がなくなつたつて。私、そんなに泣かないわ。泣くような戀愛しないもの」

「あんたは理性的なのよ」

「逆よ、これでも情熱家なのよ」

キャベツはきれいに細く揃って切つてある。それに箸をつけながらみどりはひよいと氣がついたように、

「どうして、こんなに細く切れるの」

「庖丁の腕よ」

「へえ、私、こんなに切れないわ」

みどりは泣いた感情をちよつと忘れたらしい。咲子の方が訊き出した。

「それで鐵夫さん、くにへ歸っちゃうの」

「そうなの。だって、就職できないでしょう。それに身體もこの頃少し悪いらしいの。田舎に歸つて、お店の手傳いをする、っていうの。あの人の家、旅館なの」

「旅館の若旦那か」

「そんなに大きい旅館じゃないの。あの人、宿屋がきれいなんですって。だけど東京じゃ就職できないんですもの」

「就職がないと、戀愛も終りなのね。あんたも鐵夫さんの田舎へ一緒に行くわけにゆかないの」

「そんなに簡単にゆかないわ」

「そうねえ。じゃ、あきらめるのね」

「だって苦しいのよ」

のどをつまらせて、また聲を上げて泣いた。泣聲というものは傳染する。咲子も泣きそうになって、

ぐっとこらえた。

「あんたって、ほんとに純情ねえ。何とかならないの。鐵夫さん男だもの。私、會って云って上げましょうか」

「ううん、あの人だって苦しんでいるの。一生忘れない、って云っているわ」

咲子はそれを聞くと、今度はむずむずしてくるように、キャベツのきざんだのを口いっぱいにつめた。

「あたし、今日はノートを書そうとおもって學校を休んだのよ。だって試験になってあわてるんだもの。會社が理解がないから、どうしても初めの時間、出られないでしょう」

「ごめん。咲子の貴重な時間。だって、ほかに誰にも云う人いないんだもの」

「いいわ、だから、今夜はあなたのおつき合ひして上げる。泣きなさいよ」

「泣かして……」

みどりはまた茶碗をおいて、ふふふう、と鼻を鳴らしたけれど、もう涙は出つくしたらしい。健康そうな顔が光って、氣の好い表情だ。咲子が學校のことを云い出したので、自分の遂に挫折した學業をおもい出した。

「加治君、つづけて来る？」

「加治千太？　來てるわよ」

と、咲子は冷淡に答えた。そのくせ、借りたノートというのは加治千太のものだった。食事がすんで茶ぶ臺を片寄せると、咲子は脚をのばした。三疊の部屋といっても一疊は、上に押入れが出っ張っ

ているので、立って使えるのは二疊だけ、あとの一疊は寝るときに脚を伸ばすだけの場所だった。押入れの下に今投げ出した咲子の脚はすんなりしていた。

失戀もまた楽しいのかな、と、咲子はひそかに客觀的に考えている。その中でふと、加治千太の奴と何の連絡もないみたい、そんな荒っぽい言葉で、ひょいと加治千太のことが浮んできた。

その夜、矢澤次枝と勝田伸の二人は、外苑を歩きつかれて、新宿のある喫茶店に入ったとき、どちらも少し不機嫌になっていた。ゆきつくところがない、だからしょうことなしに、その喫茶店によるめきはいったというようなことだった。

その喫茶店では、常連らしい黒いベレー帽の男が、自分でレコードをえらび出してかけていた。シヤンソンだった。沈んだような女の聲がフランス語で歌っていた。

それでも勝田伸は、飲みものを次枝にたずねた。

「何、飲む？ 僕はコーヒーだ」

「じゃ、あたしも」

と、次枝は伸の不機嫌な聲に遠慮したようになって順應した。

「何か、自分の飲みたいもの、いいなさいよ」

と、伸はまた云った。伸がコーヒーといえば、自分もじゃそれを、というのが、伸の今の不機嫌を一層突つくことになるのだ。

「あたしも、それでいいのよ」

と、次枝は今度は、いどむように微笑した目を、下から伸の顔に向けて答えた。

「じゃ、コーヒー二つ」

伸は給仕に云って、自分は煙草をとり出した。そしてわざと次枝から視線を反らして。自分ひとりの不機嫌を見つめるような表情をした。

いつまでもこんなことをくり返しているのは堪まらない、とでも考えているように見えた。次枝はその責めが自分にあるとおもうから、悲しくなり、男の氣持が遠のいてゆくような不安になる。

「何を考えているの？」

と、次枝は笑いかけた。その微笑が悲しみをまじえているから、次枝の優しく丸い、如何にも女らしい顔の印象を餘計愛らしく、いとしいものにしていた。

伸は横目にじろつとその次枝の表情を見た。丈夫そうに背の高い伸は、顔立ちもそのように目鼻の造作が大きくて締まっている。無愛想な表情でじろつと見られるとこわいみたいだ。

「なんにも」

と、ぼそつと云ったが、伸は次枝を見たとき、彼女の悲しい微笑の顔を、両手でぎゅつと自分の胸に抱え込んで押しつけない欲求を感じ、尙じいつと次枝の顔から目を離さなかった。次枝は、こわいような伸の大きい目が、何を語っているかわかる。まぶしげに首をかしげて、

「何か、考えているわ」

と、ひとり言みたいに云ってから、

「つかれた？」

と、ゆっくり訊いた。

そんな優しい云いかけは、今の瞬間の、男の氣持が遠のいてゆくような不安から、つい出てくる女の媚態だった。

「ああ、つかれたねえ」

それは君のせいだよ、というように伸は、壁に背をもたせて、長い脚をもてあますようにした。暫く黙っていた。次枝はコーヒー茶碗を口元に持ったまま、

「あれは、グレコでしょう」

と云った。

「ああ」

と伸はぶっきら棒に云った。次枝のそんな氣持の餘裕が癢に障るというようにもみえた。

もうさんざん話し合つたことなのだ。しかもちつとも進展しないのだ。一體次枝は、どんな氣持なのだろう、と伸はいらいらする。今だって、伸がコーヒーといえば、自分もコーヒーという。それは伸にむかつて順應しているようにみえながら、根本の大事なことで、がんとして、動き出さない。次枝には自主性があるのか、ないのか、伸はわからないような氣になつてくるのだ。

それなのに次枝の、優しく丸く柔かい顔、悲しい微笑がもつとも、こちらの愛情をそそる顔。グレコでしょう、もないもんだ、と伸はおもう。伸はまた感情が波立ってきて、

「これから、どうする？」

と訊いた。彼の荒けずりのような鼻や頬のあたりが、苦痛をこらえて横向きにおかれている。

そんなこと訊かなくなつてわかつているのに、と、次枝はまた臉をおとして、

「もう、歸る」

と、低い聲で云つた。

仲は判りきつてゐる返事だから黙っている。しかし氣持はおさまらない。仲は柄にもなく皮肉を云う。

「おっかさんの手前があるからね」

にやつとして、

「一體、君は幾つだ。いやに古風だなア」

そう云つて今度はじろじろと次枝を見た。ひょいと云つた、古風だなアという言葉が、彼の胸の中でくり返されている。そのくせ俺は、次枝のこの古風さをこそ愛している、とおもう。

すると次枝は唇を閉じてちよつとじつとしていた。それから云い出した。

「古風かしら。そうね、古風ね。だけど、そんなに割り切れるかしら」

ああ、またむし返した。いつでもここで打つかる。仲は索然とする。

「もういいよ。わかつたよ。やめよう」

そう突つ放されると次枝は、胸の中に冷めたい風が吹きぬけるようだ。がやがやと學生がはいつてきて、あたりが騒がしくなつたとき、仲は、

「出よう」